

われは ^{うみ}湖の子 ^こさすらいの
^{たび}旅にしあれば ^{しみ}しみと
^{のぼ}昇る ^{さぎり}狭霧や ^{さざ}さざなみの
^{しが}志賀の都よ ^{みやこ}いざさらば



第24回

「琵琶湖周航の歌」 音楽祭合唱コンクール

参加団体
募集

開催日 2020年6月28日(日) 午前10時30分開演(予定)

会場 高島市民会館 滋賀県高島市今津町中沼 1-3-1

主催：琵琶湖周航の歌記念事業実行委員会

共催：高島市・高島市教育委員会

後援：滋賀県・滋賀県教育委員会・滋賀県合唱連盟・公益社団法人びわこビジターズビューロー
公益社団法人びわ湖高島観光協会・NHK 大津放送局・NHKびわ湖放送・KBS 京都

協力：湖西合唱協会・高島市商工会・琵琶湖周航の歌資料館・高島少年少女合唱団

事務局：琵琶湖周航の歌記念事業実行委員会事務局

〒520-1224 滋賀県高島市安曇川町上小川106 藤樹の里文化芸術会館内

TEL 0740-32-2461 / FAX 0740-32-2460 / E-mail bungei@city.takashima.lg.jp

第24回「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクール参加団体募集

時下 皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

「琵琶湖周航の歌」誕生の地であります高島市は、この歌を後世に引き継ぐため、毎年合唱コンクールを開催し、全国から多くの合唱団の参加をいただいています。

この度、標記合唱コンクールを開催するにあたり、下記の募集要項に基づき参加団体を募集しますので、ご案内申し上げます。参加をご希望される場合は、このチラシの申込書に必要事項をご記入のうえ、申込期限までに提出いただきますようお願いいたします。

募集要項

【開催日】2020年6月28日(日) 午前10時30分開演(予定)

【会場】高島市民会館(滋賀県高島市今津町中沼1-3-1)

【入場料】一律500円

【参加資格】8名以上の合唱団 ※指揮者・ピアニストを除く。

【募集団体数】20団体(定数になり次第締め切らせていただきます。)

【演奏曲目】課題曲「琵琶湖周航の歌」[作詞:小口太郎 原曲:吉田千秋]と自由曲(自由曲の曲数は問いません。)

【演奏規定】合唱の声部(二・三・四部)および児童、女声、男声、混声の区別は問いません。

課題曲、自由曲の順に歌っていただきます。

課題曲の編曲は自由で、1番から6番のうち3コーラス以上歌詞で歌っていただきます。

課題曲の歌詞については、当方指定のものを歌っていただきます。

課題曲の演奏内容

- ・琵琶湖のもつやさしいイメージにふさわしいものであること。
- ・合唱コンクールにふさわしいものであること。

【演奏時間】課題曲と自由曲をあわせて8分以内とします。(指揮者がいる場合は、手の振り始めから振り終わりまで。指揮者がいない場合は演奏の始まりから終わりまで。)

【指揮、伴奏】指揮者の有無は問いません。

伴奏用楽器はピアノのみ可能です。(ピアノ以外は使用できません。)

※ピアノは主催者で用意します。

【出演順】琵琶湖周航の歌記念事業実行委員会が決定します。

【審査】審査員 上田 ひとみ(滋賀県合唱連盟理事) 柴田 英夫(滋賀県合唱連盟理事)

林 隆史(声楽家)

(敬称略)

【表彰】金賞 1団体(賞状・副賞5万円)

銀賞 1団体(賞状・副賞3万円)

銅賞 1団体(賞状・副賞1万円)

奨励賞 3団体(賞状・副賞特産品)

【参加料】一般 10,000円 / 児童合唱団、小学校、中学校、高等学校 5,000円

【募集期間】令和2年1月4日(土)~令和2年2月29日(土)

【申込方法】参加申込書に必要事項を記入の上、下記申込先まで郵送、FAX、E-mailで提出して下さい。

【楽譜の提出】当日演奏する全曲(課題曲を含む)の楽譜を各3部、事務局が指定する日までに提出していただきます。(出版されているものについては、出版物を提出していただきます。)

なお、後日3部とも返却いたします。

【その他】会場の構造上、階段移動が必要となる場合がありますので予めご了承願います。

【申込・問い合わせ先】〒520-1224 滋賀県高島市安曇川町上小川106 藤樹の里文化芸術会館内

琵琶湖周航の歌記念事業実行委員会事務局

TEL 0740-32-2461

FAX 0740-32-2460 E-mail bungei@city.takashima.lg.jp

第24回「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクール参加申込書

合唱団所在地	都道府県		市区町村		出場者数	名	
合唱団名	(ふりがな)		代表者名	(ふりがな)		合唱	名
						指揮・ピアノ	名
					同行スタッフ	名	
					合計	名	
指揮者・ピアニスト	指揮者	(ふりがな)		ピアニスト	(ふりがな)		
課題曲	声部	声部合唱		[編曲者名]			
自由曲	声部	声部合唱					
	①曲名	(ふりがな)		作曲者名			
	作詞者名			編曲者名			
	②曲名	(ふりがな)		作曲者名			
	作詞者名			編曲者名			
舞台	指揮台	要・不要		指揮者譜面台	要・不要		
	ピアノ位置	中央・下手・不要					
	ピアノ屋根	開けない・ミニ・半開・全開					
合計演奏時間	約	分	秒				
メッセージ	団体紹介に使用しますので参加動機や活動内容などをご記入下さい。						
連絡責任者	氏名	(ふりがな)					
	住所	〒					
	TEL		FAX		携帯		
	E-mail						
使用交通機関	JR湖西線・バス(台)・自家用車(台)						
個別講評	希望する・希望しない						

※コンクール当日の会場周辺は、混雑・渋滞・駐車場不足が予想されますので、ご来場は出来るだけ公共交通機関をご利用いただくか、お車に乗り合わせの上お越しください。
 なお、会場は、JR近江今津駅東口から徒歩3分程度です。
 ※プログラムに掲載の為、楷書で正確にご記入下さい。(氏名や曲名にはふりがなを付して下さい)
 ※参加申込書は、令和2年2月29日(土)までに提出してください。
 ※個別講評は、公演終了後1時間程度を予定しておりますので、ご希望の有無をご記入ください。

琵琶湖周航の歌

三高の琵琶湖周航

第三高等学校（現京都大学）以下「三高」の琵琶湖周航が始まったのは、明治26年（1893年）4月1日のことでした。この時の周航記によってコースを辿ってみましょう。

大津三保ヶ崎で新艇三隻の進水式・部員たちの壮行式のあと、いよいよ周航に出発、この日は北比良（旧志賀町）に到着し柳屋という旅館に宿泊しました。2日は北小松（同）に寄港した後、勝野（旧高島町）で上陸、小川村（旧安曇川町）の藤樹書院を訪ねて再び乗船し、今津に到着、福田屋に宿泊しています。3日は今津を出発して竹生島に上陸、賤ヶ岳に登った後再び乗船し姉川の岬を回って長浜に到着、井筒屋に宿泊しています。4日は磨針峠に登った後彦根に上陸し、彦根城を見学の後、八幡へ向かおうとしましたが、琵琶湖はこの日波が高く、艇は浜に打ち上げられてしまったので、予定を変更して彦根の松月亭に泊まりました。5日は沖の白石、多景島を眺めながら南下し、沖島を経て三保ヶ崎に帰りました。

こうして行われてきた三高の琵琶湖周航のなかで、琵琶湖周航の歌は水上部員の小口太郎らによって作られたのです。

小口太郎をメンバーに加えたクルーの琵琶湖周航は、大正6年と7年、どちらも夏休み中の6月に行われました。

当時のメンバーなどの証言によると、太郎は1回目の周航、すなわち大正6年にはすでに琵琶湖周航をもとにした詞を作っていて、周航途中の2日目の夜、宿泊した今津の宿で、友人たちに発表したといっています。三高水上部には当時いくつかの部歌がありましたが、太郎ら新しい時代の青年は時代にあった部歌を自分たちの手で作ろうとしたのでした。

この時の周航は3泊4日にわたり、1日目は大津を出発して雄松（旧志賀町）で宿泊、2日目は雄松から北上して今津に着き宿泊、3日目に竹生島に上陸した後長浜に立ち寄り、彦根に宿泊、4日目には長命寺に寄って大津に寄港しています。この周航と翌年、再び行った琵琶湖周航で、太郎は6番まで続く琵琶湖周航の歌を完成させたということです。

小口 太郎

琵琶湖周航の歌の作詞・作曲者は長い間、小口太郎とされてきました。しかし近年の調査で、太郎が今津の宿で発表したのは詩のみで、曲は吉田千秋という人物がつくった「ひつじぐさ」という曲であるということが明らかになっています。

小口太郎は明治30年（1897年）8月30日、長野県岡谷市で生まれました。家のすぐ近くには諏訪湖があり、太郎は幼いときから湖に親しんで育ったようです。小学校時代は「開校以来の秀才」と評判で、作文や詩を作ることは大変得意でした。また、家族全員が音楽好きで、現在も生家には太郎が愛用したというバイオリンと尺八が残されています。諏訪中学を卒業後、1年間の代用教員生活を経て、大正5年（1916年）9月

に三高理学部に入学した太郎は、水上部と弁論部に属するとともに、当時市内在住者以外は義務づけられていた寮生活を送ることになりました。ここで学生たちによって作られた、いくつかの寮歌に接し、太郎自身も学生のための歌を作ろうと志すようになったようです。

吉田 千秋

「ひつじぐさ」の作曲者、吉田千秋は、明治28年（1895年）2月28日、新潟県新潟市で生まれました。父吉田東伍は『大日本地名辞書』の編さんで名高い歴史地理学者で、千秋の生後間もなく、両親は東京で暮らすようになりました。千秋は祖父母の住む新潟と東京を転々としませんが、幼いころから結核を患い、入院生活を送ったこともありました。しかし学生時代の千秋は活発で利発、また語学が得意で、15歳のときにはイギリスのペンパルクラブに入会するほどでした。明治45年、東京農業大学に入学した千秋は、そのころから音楽・語学関係の雑誌に投稿を始めるようになりました。大正2年に病状の悪化で大学を退学した後は、音楽への興味を高めるとともに、当時流行し始めたばかりのローマ字の普及運動に参加し、雑誌「ローマ字」に自身の研究成果を次々と発表しました。

その「ローマ字」9月号には千秋がイギリスの童謡「WATER LILIES」を訳詞した「ひつじぐさ」が載せられています。千秋は、大正4年、この「ひつじぐさ」の訳詞にみずから曲をつけ、雑誌「音楽界」8月号に発表しました。これが琵琶湖周航の歌の原曲となる「ひつじぐさ」です。

このように同世代に生き、ともに夭折した2人の青年によって、琵琶湖周航の歌は作られました。もちろん太郎と千秋は生前にお互いを知る由はなく、まして自分たちの作った詩や曲が、これほど長く多くの人に歌われる有名な歌になるとは想像もしていなかったでしょう。

太郎が琵琶湖周航の歌の詩を今津の宿で友人に発表したとき、クルーのメンバーであった谷口謙亮が、当時の三高の「桜楽会」という音楽グループの紹介によって学内で流行していた「ひつじぐさ」のメロディーで歌ってみると大変良く合った、というのが太郎の詩と千秋の曲を結びつける発端となったのです。

「琵琶湖周航の歌」の生まれたまち高島市今津町ではこれを記念して毎年6月に「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクールを開催し、この美しい歌を後世に引き継ぎます。